

近松のなぞ

——大石の『預置候金銀請拂帳』について——

笹田 博

〔抄録〕

本研究の目的は、大石の『預置候金銀請拂帳』は帳簿ではないことを、近松がスペイン語の原書で読んだと伝えられている『ヒイデスの導師』との関連性によって論証することである。まず、本稿では『ヒイデスの導師』の四部構成の第一部「世界創造」という抽象的表現と大石の『預置候金銀請拂帳』に示された数値や

文字の具体的表現との関連性から導き出した『万国総図』によって論証する。

キーワード 大石内蔵助、近松門左衛門、『預置候金銀請拂帳』、『ヒイデスの導師』、『万国総図』

一

大石の『預置候金銀請拂帳』は、次のように説明されている。「吉良邸討ち入りに費やされた軍資金は『約七百両』——武器購入費から潜伏中の会議費、住居費、飲食費に至るまで、大石内蔵助は、その用途詳細を記した会計帳簿を遺していた⁽¹⁾。「内蔵助が『金銀請払帳』を締めて決算したのは、討ち入り準備をほぼ終えた元禄十五年十一月のことである⁽²⁾。「確かな資料としては、「…」内蔵助が『金銀請払帳』を他の帳面類に添えて、瑤泉院の用人である落合与左衛門に送った十一

月二十九日付の書状がある。この書状は、日付こそ十一月二十九日だが、落合に届けられたのは、討ち入り当日、十二月十四日の晩である⁽³⁾。「東京大学史料編纂所の前身である帝国大学史料編纂部が、明治十九年五月に影写体を作成しているので、少なくともこの段階で同資料がすでに箱根神社の所蔵となっていたことが分かる⁽⁴⁾。

沼田嘉穂横浜国立大学名誉教授は、帳簿を以下のように定義した⁽⁵⁾。帳簿とは経済主体（企業）の経済活動を数値（主として貨幣金額）によって、継続的に記入する紙面をいう。このため商業信書のごときは原則として帳簿ではない。また証憑や伝票の類もその

もの自体は帳簿ということではできない。唯、これらを記入順―それは取引の発生順である―に揃えて、経済活動の継続的な記録を作ることができ、その場合、これを帳簿として認めることができる。

私は一九七九年十二月十一日夜、NHKTVで、大石の『預置候金銀請拂帳』の存在を知った。後に、その帳簿の資料である赤穂市が発行した『忠臣蔵』（第三卷⁶）を入手し、考察した。同書に次の見出しのもとに大石の『預置候金銀請拂帳』（図1）が明示されている。

二五 大石良雄金銀請拂帳

―瑤泉院への預かり金支出決算報告―

神奈川県 箱根神社所蔵

まず、同資料を考察して気付くことは、「金銀請取元」の入金四口に日付がないことである。続く「右金銀之払左二記」の出入一―三口にも全て日付がないことである。ただし、入金一口目の説明文中に「六月四日」とあり、二口目の説明文中に「六月三日」とあり、日付が前後しているのである。

さらに、出金の部の四ヶ所、すなわち、十三口目、三七口目、六二口目、六七口目、に半円形の目じるしが明示されている。十三はそのまま十三とわかる。三七は三に七を加算すると十となり、下の三両を加算すると十三になる。六二は下を見ると一三六匁で十三がある。六七は六に七を加算すると十三となる。この十三という数値にこだわる大石の意図が不明であった。

私は、沼田氏の定義に照らして、大石の『預置候金銀請拂帳』は帳

簿とするには問題があると感じた。

ここで、先行研究を概観しよう。

まず、八木哲浩神戸大学名誉教授の研究を検討する。先に示したように『忠臣蔵』（第三卷）の労作は、先学として誠に尊敬にあたいするものと言える。この著作がなければ、研究を進めることが困難であったからである。この理由により、同氏による二冊目の研究成果といえる『忠臣蔵』（第一卷⁷）を検討する。ところが、同書の一三一頁の表7で、正しくは「元禄十四・六・四 六・三」とあるべき所を、「元禄十四・六・三 六・四」と変更している。原本の大石の帳簿は、赤穂浅野家の公文書と言えるので、大石の意図を正確に読み取るという観点から、この変更は好ましいことではない、と考える。

一九七九年から二七年後の二〇〇六年四月十五日、私は技術士の塚本勇三氏の招待を受け、近松門左衛門の九代目、近松洋男氏（京都外国語大学名誉教授、スペイン語専攻、スペイン文化勲章受賞）による口伝解禁の講演会に出席した⁸。その折、近松門左衛門は二十歳から、赤穂浅野家が設けた塩の道塾でスペイン語や航海術を学び、三十歳まで台湾方面へ塩の貿易に従事したことを話された。また後の赤穂事件で参謀をしたこと等を話された⁹。さらに、近松洋男氏は、握った左手を地球に見立てて、リングを切るようなしぐさをされた。これがヒントになり、坂本満氏他著の『南蛮美術と洋風画』¹⁰に出会い、この中で説明された、「一四九四年六月七日にトルデシリヤス条約によって東航路をポルトガルに、西航路をスペインに権利を認めて、西経四六度三七分、東経一三四度の線で『リングのように』地球を分割した」と

三 大石山銀請掛帳

元禄十五年
預置候金銀請掛帳
十一月
大石内取掛

金銀請取元
 一 金四百三拾七步
 一 金四百三拾七步
 一 金貳百貳拾拾
 一 金參拾

241

四 赤穂浪士の証記

一 金三歩
 一 金拾四兩七歩
 一 金拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩

一 金貳拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩

243

一 金八兩
 一 金拾六兩貳歩武朱
 一 銀三及六分
 一 銀三及五分
 一 銀七兩貳歩武朱
 一 銀六及五分
 一 銀七拾兩
 一 銀貳拾三及
 一 銀四拾三及
 一 銀貳拾三及
 一 銀貳拾三及

一 金貳拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩
 一 金貳拾四兩七歩

242

図 1-1 預置候金銀請掛帳

の説明を発見した。そして、このトルデシリヤス条約の数値（西経四六度三七分、東経一三四度）が大石の帳簿の入金の部一口目に、逆さまに組み込まれているのを見つけた（図2）¹¹。

また、その折の発表で、近松門左衛門が、スペイン語の原書で読んだと伝えられる『ヒイデスの導師』を紹介された。これによって、近松氏が編訳された『キリシタン版「ヒイデスの導師」の原典的研究¹²』を知り、同志社大学図書館にて借用した。二〇〇六年五月七日早朝七時、同書の第一部「第四章 四元素のことについて」¹³で示された土、水、空気、火を知った。すなわち、①「諸元素の中で一番下にある土から始める」¹⁴。②「次に海に移ろう。[...]また、凶作と飢饉の時

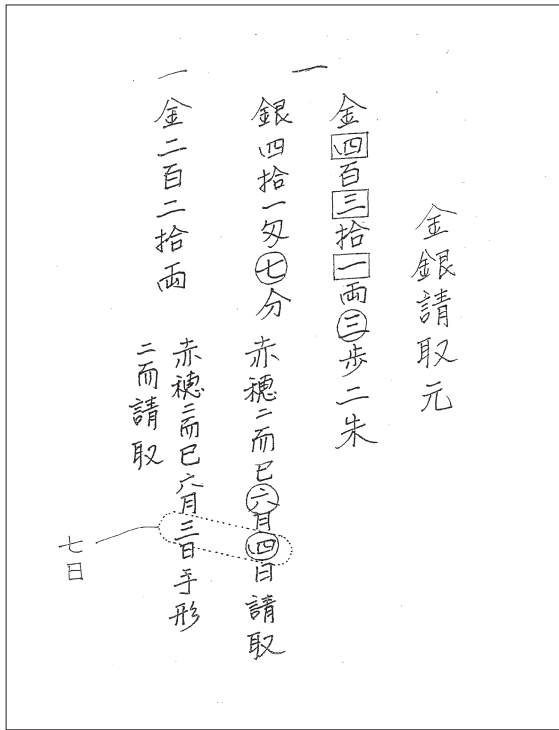


図2 筆者描図(2019年描図)

にも海は役立つのである。「[...]水は上位の元素である」¹⁵。③「空気という第三の元素も水に劣らず、我われが命を保つのに必要である。というのは、我われは空気呼吸してきており、また空気を以って心臓を冷やしているのである」¹⁶。④「第四の元素は火である」と記されていた。これがヒントになり、大石の帳簿の出金の部四か所、すなわち、十三口目で土が大坂と、三七口目で水が飢饉と、六二口目で火が飛脚と、六七口目で空気が心当と表現されて組み込まれているのを見つけた（図3）。

私は、大石の帳簿の入金の部に、貨幣数値以外のトルデシリヤス条約の数値や出金の部四か所に経済活動以外の『ヒイデスの導師』に記載された四元素を発見した。私はこれらを根拠として、沼田氏の帳簿の定義に照らして、大石の『預置候金銀請拂帳』は帳簿ではないのではないかと仮説を立てた。

その仮説に基づき、大石の『預置候金銀請拂帳』は帳簿ではないことを、近松がスペイン語の原書で読んだと伝えられる『ヒイデスの導師』との関連性によって論証したく思う。

二

まず『ヒイデスの導師』の四部構成の第一部「世界創造」という抽象的表現と大石の『預置候金銀請拂帳』に示された数値や文字の具体的表現との関連性を検討する。その結果、世界地図である『万国総図』を大石の『預置候金銀請拂帳』から導き出す。この方法で、大石の『預置候金銀請拂帳』は帳簿ではないことを論証する。

トルデシリヤス条約

近松洋男氏によれば、近松門左衛門は『ヒイデスの導師』をスペイン語の原書で読んでいたという。同書は四部構成から成り、その第一部は、「世界創造」である。このことを意識し、坂本満氏の『南蛮美術と洋風画』を考察する。先ず一、南蛮美術の西力東漸と文明開化において、で先の仮説の根拠となった、大石の『預置候金銀請拂帳』の入金の部の一口目に組み込まれた、一四九四年六月七日、スペインとポルトガルの両国王間で成立したトルデシリヤス条約の数値（西経四六度三十七分、東経一三四度）を再確認した。

世界地図

次に五、世俗画の主題を背景において、で世界図を認め、関係する書物を調査した。その結果、山川出版社の『海の道と東西の出会い』⁽¹⁴⁾と『詳説世界史研究』⁽¹⁵⁾に、「大航海時代地図（図4）と「ヨーロッパ人による航海と探検」（図5）の世界地図を発見した。図4は、「トルデシリヤス条約の境界線は地球を一周にするものである」⁽¹⁶⁾として西経四六度と東経一三四度であるとする。この理解はスペインの主張である。図5は、同条約が「世界を東西に分割し、西経四六度三七分の線の東側についてはポルトガルの、西側についてはスペインの領有を認めた」ものであるとする。「その後、一五二九年のサラゴサ条約で東太平洋に新しい境界線が取り決められ」⁽¹⁷⁾たとする。この理解はポルトガルの主張である。以上の理解を前提にすれば、先の坂本氏が引用した「西経四六度三七分、東経一三四度」の数値は、スペイン

とポルトガル両国の主張を合成したものであると思える。

万国総図

これらの考察から、大石の帳簿の入金の部の一口目に組み込まれていた、四六度三七分と一三四度の数値を基に、大石の帳簿の出金の部も含めて、帳簿全体の構図（図6）を見渡すことにした。その結果、「金銀請取元」の合の銀の額が「銀四拾六匁九分五釐」と表現されているのは、西経四六度でも四七度でもない西経四六度三七分を表現した数値に思える。「請取金元ニ指引」で「金七両壹歩不足」と表現されているのは、七を四と三に分解すれば、四三二となり、東経一三四度を逆さまに表現した数値に思える。これらを先の「大航海時代地図」に見立て、さらに、これに、『ヒイデスの導師』に表現された四元素（土、水、火、空）を重ねて表現すると（図7）になる。

さらに、世界地図の書籍類を調査していると、『世界図の歴史』⁽¹⁸⁾中に『ホンディウスの世界地図』（図8）を発見した。これは「一六三〇年。当時の典型的な世界地図。四元素が「…」地図を取り巻く」⁽¹⁹⁾いている。この『ホンディウスの世界地図』は中国に渡り、『万国総図』という一般名称で表現された。ただし、これは太平洋を中心に行っている。そして、この『万国総図』（図9）は、「一六四五年に長崎で木版印刷により制作された」という。これは、真に（図7）と同じ構図であることを示している。

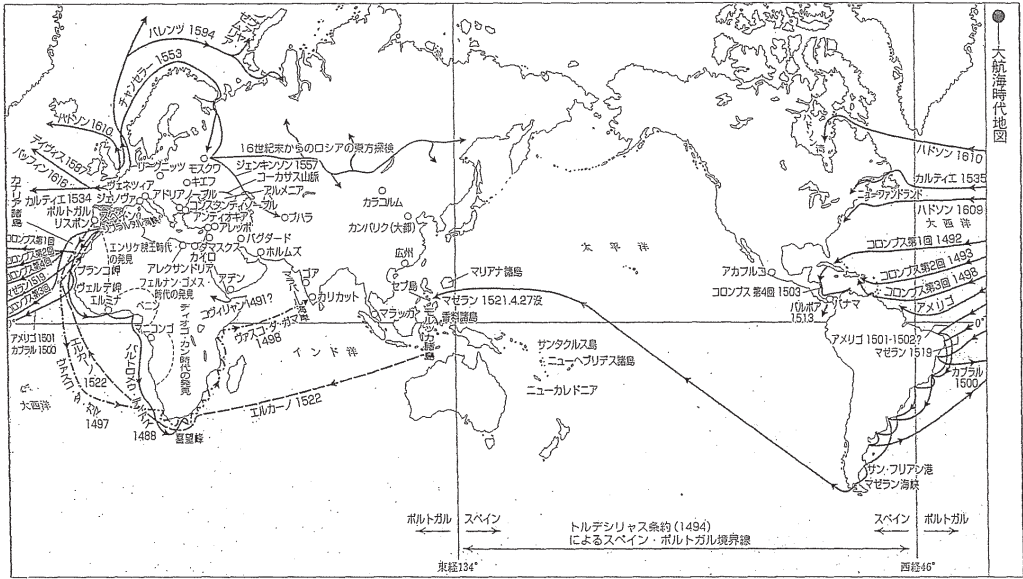
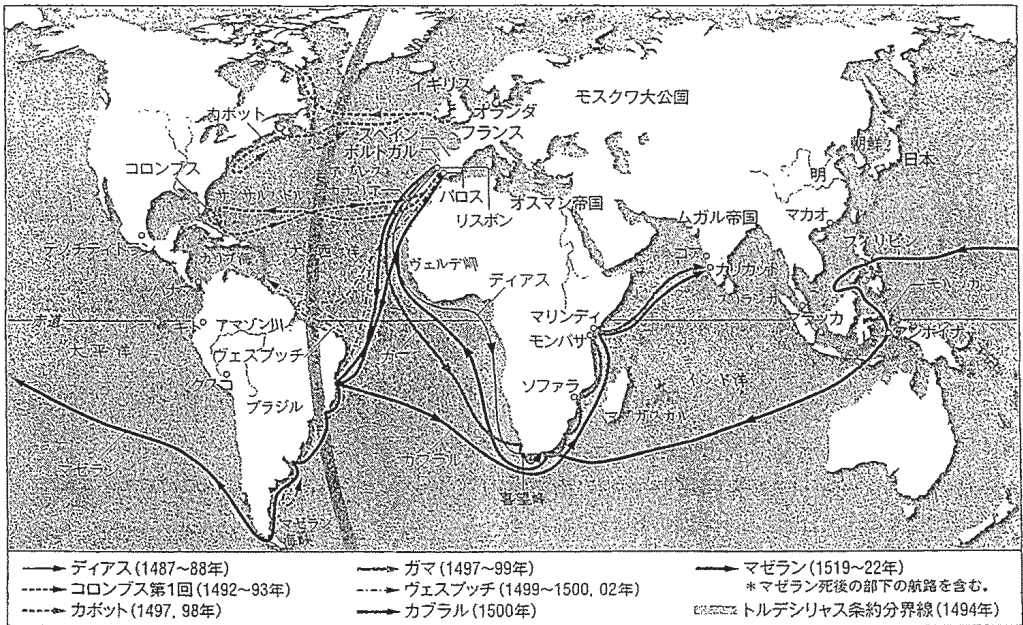


図4 トルデシリヤス条約—スペイン



ヨーロッパ人による航海と探検

図5 トルデシリヤス条約—ポルトガル

	113	67 62	37	13	1		
帳簿	七・一	() () () ()			四六・九五	四三・一三	四一七・六四
							二二・六三

図6 筆者描図(2019年描図)―預置候金銀請拂帳

	113	67 62	37	13	1		
世界地図	東経一三四度	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; display: inline-block;"> 空 火 水 土 氣 </div>				西経四六度三七分	

図7 筆者描図(2019年描図)―世界地図

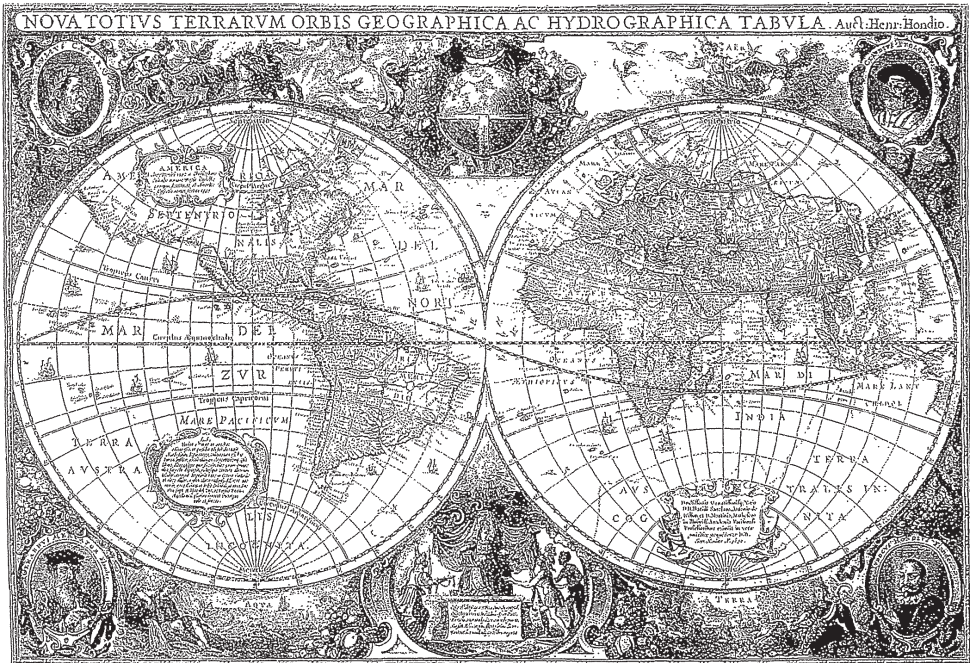


図8 ホンディウスの世界地図

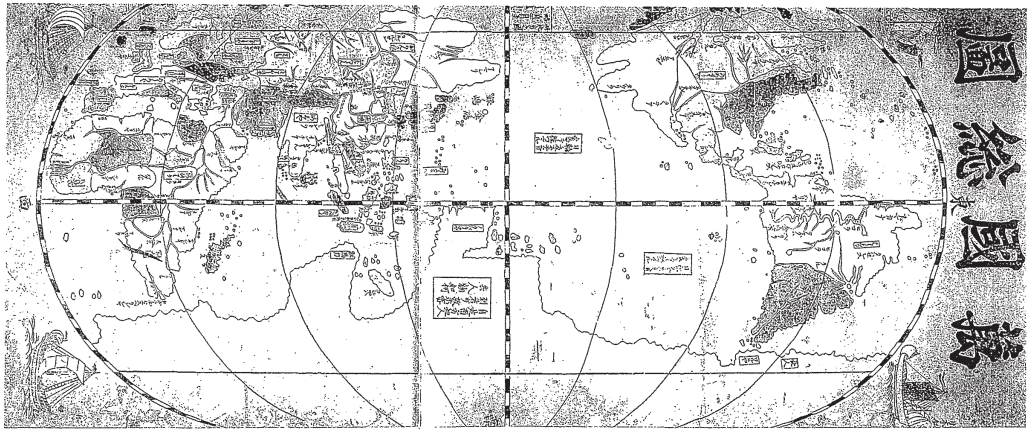


図9 万国総図

三

本研究の目的は、大石の『預置候金銀請拂帳』は帳簿ではないことを、近松がスペイン語の原書で読んだと伝えられている『ヒイデスの導師』との関連性によって論証することである。本稿は、『ヒイデスの導師』の四部構成の第一部「世界創造」という抽象的表現と大石の『預置候金銀請拂帳』に示された数値や文字の具体的表現との関連性を検討した。まず、トルデシリヤス条約の数値確認をし、次に、世界図を確認した。さらに、大石の『預置候金銀請拂帳』の構図を確認した。その結果、まず、大石の『預置候金銀請拂帳』の構図は「大航海時代地図」に『ヒイデスの導師』に表現された四元素（土、水、火、空気）が組み込まれた形になっていることを確認した。次に、『ホンダイウスの世界地図』を発見した。その世界地図の中にも四元素が組み込まれている。それが中国に渡り、太平洋を中心とする『万国総図』に改編され、この『万国総図』が日本に渡り、長崎で制作されたことを確認した。その結果、大石の『預置候金銀請拂帳』は表面上では帳簿の作りになっているが、その真意は『万国総図』を表現していることを解明できた。このことから、大石の『預置候金銀請拂帳』は帳簿ではないとの結論を導いた。

大石の『預置候金銀請拂帳』について、新たに、『ヒイデスの導師』という宗教書との関連性を検討することによって、大石の『預置候金銀請拂帳』の真意が解明できた。このことは、当該研究における学際的研究の必要性と可能性を示す具体例であり、今後の研究に貢献

するところが大きいと評価することができる。

〔注〕

- (1) 山本博文 『忠臣蔵』の決算書（新潮社 二〇一二年）カバー
- (2) 同書 一八五頁
- (3) 同書 一八六頁
- (4) 同書 九四頁
- (5) 沼田嘉穂 『簿記論攻』（中央経済社 一九六二年）一二五頁
- (6) 八木哲治 『忠臣蔵』第三卷（赤穂市 一九八七年）二四一頁
- (7) 八木哲治 『忠臣蔵』第一卷（赤穂市 一九八九年）一三一頁
- (8) 近松洋男 『近松門左衛門が京の都で発信した合理主義の輝き』（京都技術士会主催 二〇〇六年）
- (9) 近松洋男 『口伝解禁 近松門左衛門の真実』（中央公論新社 二〇〇三年）四六頁
- (10) 坂本満他 『原色日本の美術 第二五卷 南蛮美術と洋風画』（小学館 一九七〇年）一六五頁
- (11) 筆者描写（二〇一九年）○で西経□で東経の数値を囲む
- (12) ドミニコ会士フライ・ルイス・デ・グラナダ神父 近松洋男編訳『キリシタン版「ヒイデスの導師」の原典的研究』（思文閣出版 一九九〇年）序文 xi
- (13) 同書 四三・四四・四五・四六頁
- (14) 青木康征 『海の道と東西の出会い』（山川出版社 二〇〇六年）二二頁
- (15) 木村靖二他 『詳説世界史研究』（山川出版社 二〇一八年）二五二頁
- (16) ロバート・克蘭シー他 レイモンド・ジョン・ホージェイブ監修 樺山紘一監訳 こどもくらぶ 訳 『探検と冒険の歴史大図鑑』（丸善出版 二〇一五年）六九頁

- (17) 木村靖二他 二五一頁
- (18) ピーター・ウィットフィールド 樺山紘一監修 和田真理子・加藤修治 共訳 『世界図の歴史』（大英図書館・ミュージアム図書 一九九七年）
- (19) 同書 七五頁
- (20) 同書 九一頁

〔附图〕

- 図1 預置候金銀請拂帳
- 図2 筆者描図（二〇一九年描図）
- 図3 預置候金銀請拂帳一部分
- 図4 トルデシリヤス条約―スペイン 『海の道と東西の出会い』出典
- 図5 トルデシリヤス条約―ポルトガル 『詳説世界史研究』出典
- 図6 筆者描図（二〇一九年描図）―預置候金銀請拂帳
- 図7 筆者描図（二〇一九年描図）―世界地図
- 図8 ホンダイウスの世界地図
- 図9 万国総図

〔付記〕

赤穂市発行『忠臣蔵』第三卷の『預置候金銀請拂帳』の全文掲載に当たっては、赤穂市の許可を得ることができた。記して感謝申し上げます。

（ささだ ひろし） 文学研究科文学専攻修士課程

（指導教員・黒田 彰 教授）
二〇一九年九月三十日受理